

長崎市提案型協働事業提案企画書

団 体 名	長崎町人町プロジェクト
提案事業の名称	絶滅危惧-長崎文化再生事業
提案事業の目的	長崎開港より長い歴史と共に生まれ、継承されてきた長崎人の精神、生活風習、伝統技術、食文化、暮らしの知恵等、現在は失われたもの、継承が危惧されるもの、残していきたいもの、素晴らしい価値ある長崎文化（町人文化）を再生することにより未来の長崎のまちづくり、まちの魅力と賑わい、観光推進、交流人口の増加をはかる。目に見える効果として町人文化を活かした商品・イベント・デザイン・建物・飲食物などが創造され商業活性に寄与する。
課 題 の 緊急性・重要性	遺産や文化財の発掘や保存は推進されています。しかし人々の暮らしの中に息づく庶民風俗は時間と共に流れていきます。消失を止めようとする人々の志と力は限界に近づいています。緊急を要します。長崎のまちなかには粋で質が高く豊かな、あまりにも魅力的な独自の文化（町人文化）があります。また長崎人は外来の人々や文化と共存する温かい精神性やコミュニティを大事にしています。失われる前に現存するものをリサーチし形（データ）に残し、再生する必要があります。
協働の必要性	地域が考える未来の長崎中心市街地の姿、行政が計画する将来の中心市街地の形は同じでなければ真のまちなか再生とはなりません。整備事業完了後の長崎のまちの魅力とは何か？鍵となる長い歴史に醸成された豊かな長崎町人文化の再生は地域と行政が共に知恵を出し、相互の協力により構築され拡散されていきます。
協働による 相乗効果	まちぶらプロジェクトとして認定される取組みとして中心市街地活性化事業を実施運営でき、長崎町人文化の再認識や魅力の発信、拡散で新しい地域再生のきっかけづくりが創造されていく。情報提供や関係機関との調整、企業・学校団体との連携、長崎市の広報ツールを活用した広報活動、各課との協力依頼や連携など民間団体単体より大きな推進力がプラスされる。
協働の役割分担	<p>1 提案団体が果たそうとする役割</p> <p>消失が危惧される長崎町人文化の調査と取材。データ落とし込や編集。今後の長崎市中心市街地活性のまちづくりに活かす再生の提案。絶滅が危惧される長崎文化紹介冊子の制作。地域ならではの情報や経験を活かし長崎文化の顕彰と再生活動をつうじて広く市民へ理解と親しみ、文化の重要性を伝える。</p> <p>2 本市に期待する役割</p> <p>まちぶらプロジェクトとして事業の推進や関係機関との調整、他団体や企業・学校等とのマッチングや建築・土木分野の情報提供。事業協力ボランティア等の紹介。まちなか魅力発信や小中学校での歴史教育の参考資料として、また観光関連事業の推進等の冊子としての活用。</p>

<p>提案事業の内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●絶滅が危惧される長崎文化紹介冊子の制作 B5版 カラー 48頁 中綴じ 3,000部 カテゴリー別に編集し、長崎文化の重要性と再生の提案を含んだ内容とする。 ① 町人文化の礎を築いた外国人と背景 ② 歳時記設えと伝統技術（竹組技術・ビードロ細工 e t c） ③ 歳時記風習（衣替え・飾り・連・御礼 e t c） ④ 歳時記食文化の記録と再生 ⑤ 現在は行われなくなった催事/楽曲等 ●調査・取材・撮影・編集 ●勉強会・情報交換会の開催 ●研究発表・長崎文化再生提案シンポジウム ●広報活動と配布活動
<p>提案事業の 実施体制</p>	<p>長崎町人町プロジェクト</p> <ul style="list-style-type: none"> ●調査・取材・編集 <ul style="list-style-type: none"> ①町人文化の礎を築いた外国人と背景（担当：高木・児島他） ②歳時記設えと伝統技術（担当：山下・岩崎他） ③ 歳時記風習（担当：岩崎他） ④ 歳時記食文化の記録と再生（担当：岩永他） ⑤ 現在は行われなくなった催事/楽曲等（担当：山下他） ●長崎文化紹介冊子の制作（担当：岩崎他） ●勉強会・情報交換会の開催（担当：佐々木他） ●研究発表・長崎文化再生提案シンポジウムの開催（担当：橋本他） ●広報活動（担当：児島他） ●行政等関係団体調整（担当：岩永他） ●配布活動（全員） <p>建設局まちなか事業推進室</p> <ul style="list-style-type: none"> ●まちぶらプロジェクト認定と事業の推進 ●地域力に行政力をプラスした賑わいづくり活動支援 ●建築・土木などのハード面の情報発信 ●まちなか魅力発信への冊子の活用 ●シンポジウム等での大学・企業との連携 ●行政間での関連課との連携や調整 ●広報活動と配布活動の協力
<p>事業 スケジュール</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●平成28年4月 → 12月 <ul style="list-style-type: none"> ①調査・取材・撮影・データ整理等（随時・歳時記） ②勉強会・情報交換会（6回実施・公共施設利用） ③執筆・編集作業 ④広報活動 ●平成29年1月 → 3月 <ul style="list-style-type: none"> ①冊子の校正・印刷・製本 ②研究発表・長崎文化再生の提案シンポジウム ③広報活動・配布活動

	<p>●配布先と部数（長崎市内）</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 行政及び公的施設 300 部 ② 市内小中学校 600 部 ③ 地域自治会 100 部 ③ 神社・寺院 100 部 ④ メディア各社 100 部 ⑤ 観光関連施設・企業 1,500 部 ⑥ 市民団体 100 部 ⑦ シンポジウム参加者 200 部
<p>事業の展望及び 今後の活動展開</p>	<p>●失われつつある長崎文化に光りを当て顕在化することによって、まちなかの基本構造や精神性が再認識され長崎のまちの魅力と誇りを推進することができ、大きく変わろうとする長崎のまちのデザインを基本を活かしながら再生しようとすることの重要性をしっかりと浸透させ、活性化に繋げたい。年間をつうじて調査・取材が必要であり単年度の活動だけでは十分な顕彰ができないため次年度さらには将来もずっと活動を続けていきたい。</p> <p>●10年後の2025年を長崎町人文化発祥から400年目と位置づけ活動をしています。長崎のまちに商業地域が生まれた年を1625（寛永2年）と考えて、永続400年の重みと価値を顕彰し長崎文化再生事業のひとつの成果として活動を展開していきます。この頃には大型公共事業も完成し長崎のまちが大きく生まれ変わっています。その時長崎の中心市街地が伝統を継承し、400年続く従来の「まち」としての魅力が損なわれることなく輝き続けていることを最大の目的としています。</p> <p>1571（元亀2年）長崎開港 → 内町の誕生 → 外町の形成 → 神社寺院の建立のため職人たちの定住 → 1625（寛永2年）諏訪社が松ノ森へ、通りと商業の振興・商人の増加 → 1634（寛永11年）長崎くんち始まる、眼鏡橋の架橋、出島の埋め立て工事着工 → 1663（寛文3年）大火災によるまちなかの大きな被害 → 1672（寛文12年）復興事業による町建て完了 現在まで変わっていない長崎の町の構造ができる。</p> <p>400年近くにわたり創造され育まれ、熟成され、生活に根ざし、人々の心に宿る、独自の長崎町人文化は、我が国においても非常に魅力ある様式美や食文化など中国・ヨーロッパの文化が織り込まれた貴重な財産であり、その精神性は先進的であり温かなものである。</p>